

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00489

研究課題名(和文) 啓蒙思想における「異常者たち」「去勢者たち」をめぐる文学的哲学的総合研究

研究課題名(英文) Abnormals in Enlightenment thought: a literary and philosophical study of eunuchs

研究代表者

桑瀬 章二郎 (KUWASE, SHOJIRO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10340465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は18世紀フランスにおける「異常者たち」の文学的表象と哲学的議論を調査することで、フランス啓蒙思想、とりわけセクシュアリティをめぐるその思想の一特質を明らかにするものである。モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、ディドロ、ビュフォンといった十八世紀フランスの代表的作家・思想家の主要著作を丹念に読み込み、宦官とカストラートをめぐる無数の考察の意味を明らかにした。また、音楽論争や去勢をめぐる当時の医学的・神学的議論も参照しながら、多角的にこの現象を再構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は18世紀フランス思想・文学研究、とりわけ近年盛んなこの時期のセクシュアリティ研究に新たな視座を提示するものである。

また、本研究は現代社会の諸問題について再考するためにも有益だと思われる。たとえば、LGBTQ概念を有効なものとするには、それが決して普遍性を持つものではないこと、多様な宗教や習俗の理解が不可欠であることを絶えず想起する必要があることを示している。宦官の表象分析からは、「専制的なもの」は、今日専制政治的なものと名指しされている制度のみならず、民主的と言われる制度の内にも潜んでいることが明らかになる。

研究成果の概要(英文)：This research aims to discover the figures of the 'abnormal', especially eunuchs and castrati, as they appeared to the intellectuals of the eighteenth century. We have carefully re-examined the main writings of Montesquieu, Voltaire, Rousseau, Diderot, Buffon etc. to bring out their constant interest in the castrated and the uses in their literary and philosophical reflections. We have also shown the importance of the aesthetic debates, medical and theological controversies of this time.

研究分野：啓蒙思想

キーワード：モンテスキュー ヴォルテール ディドロ 啓蒙思想 セクシュアリティ 精神分析学 ルソー

1. 研究開始当初の背景

本研究はフランスの啓蒙期を対象に、その時代に特有なセクシュアリティをめぐる文学的表象と哲学的議論を、とりわけ「異常者」の形象に注目しつつ検討するものであった。古典主義時代を「性」をめぐる「言説の爆発」(フーコー)が起こった時期と位置付けることには、早くから多くの研究者によって疑義が提出されてきた。本研究は、フーコー同様、この時代の「性」と「異常者」に注目しつつも、言語表現の総体としての「性」についての言説ではなく、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、ディドロ、ビュフォンといった十八世紀フランスの代表的作家・思想家の主要著作に描かれる「性」を「異常者」という観点から分析するものであった。本研究が目指したのは、一言でいえば、いわゆる精緻な思想家論、作家論、作品論を組み合わせ、新たに、この時代の「性」をめぐる思想の一側面を再構成することである。

2. 研究の目的

本研究において「異常者」とは、この時期に様々な知の領域で特別な意味を付与された「宦官」や「カストラート」といった「去勢者」のことである。「宦官」は無数の文学作品や絵画作品に描かれたのみならず、モンテスキューの主著『法の精神』や『ペルシア人の手紙』に代表されるように、政治制度、とりわけ専制政治や専制政体をめぐる考察において重要な役割を付与された。「宦官」がいわば大流行した歴史的背景についての理解を深めつつ、それが啓蒙知識人によって我有化され、それに担わされることになった多様な象徴的意味、機能、役割を明らかにすることが本研究の目的であった。

「カストラート」についても同様であり、イタリア音楽もしくはフランス音楽の優位性をめぐって十八世紀フランスの代表的作家・思想家がこれについて論じている。その議論の持つ文学的、政治的、思想的、哲学的意味を明らかにすることが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

フランス啓蒙期に限定するとしても、「宦官」や「カストラート」をめぐる記述は膨大である。本研究は十八世紀フランスの代表的作家・思想家の主要著作を分析の中心に据えるが、それでも、たとえばシャルダンの大著、『ペルシア旅行記』といった当時のベストセラーなどを無視することは許されない。各種データベース(Eighteenth Century Collections Online、Electronic Enlightenment等)も利用しながら、可能な限り関連文献を調査した。次段落で示すような最新の研究を最も効率的に検討するため、使い慣れたフランス高等師範学校図書館での集中的な研究調査を行った。

「去勢者」と言うときすぐさま想起されるのが、精神分析的な意味での、とりわけフロイト的な意味での「去勢」や「去勢コンプレックス」の概念である。ジャック・ラカンによって発展させられたこれらの概念は、二十一世紀になっても様々な研究者によって深化させられた。当然ながら本研究においても、こうした概念は決定的な意味を持つ。しかしながら、本研究においてそれ以上に重要であるのは、歴史学領域、人類学領域、ジェンダー論領域で1990年代より、とりわけ英米において急速に注目され、多くの成果が発表されるようになった「去勢者研究」であった(たとえばS. Tougher、K.M. Ringroseの一連の仕事)。

4. 研究成果

十八世紀フランスの代表的作家・思想家の主要著作のみならず、シャルダンの大著、『ペルシア旅行記』のような著作をも読み直し、さらには「宦官」や「カストラート」を扱う同時代の著作を渉猟することで、また同時に、「去勢者研究」のような方法論的示唆に富む成果を参照することで、以下のような構成を明確にすることができた。(1)「宦官」の表象の象徴例としてモンテスキューの『ペルシア人の手紙』の分析から出発すること。(2)十七世紀まで遡るかたちで啓蒙期の「カストラート」論を分析すること。(3)いわゆる歴史叙述の検討から「去勢者たち」をめぐる歴史的記述を再検討すること。(4)ビュフォン、ディドロを中心とする博物誌的、生理学的、哲学的視点からの分析を行うこと。(5)、(1)~(4)を十八世紀フランスの代表的思想家の生/性の表象(特に伝記的言説と自伝的著作に注目する)と関係づけること。

出発点としたモンテスキューの『ペルシア人の手紙』の分析にかんしては(1)、(3)で扱う『法の精神』との差異を意識しつつ、「宦官」が専制政体をめぐる考察で、どのような役割を果たしているかを明らかにした。そのさい、しばしばモンテスキューに向けられてきた(今なお向けられ

ることのある) 反イスラーム、あるいはイスラームの歪曲といった問題についても考察した。(2)啓蒙期の「カストラート」論の分析にかんしては、この時期の最も重要な音楽的美学的論争であるブフォン論争のみならず、ヴォルテール、ルソーの音楽思想を考えるうえで決定的な存在であるジャン＝フィリップ・ラモアの音楽思想について集中的に調査した。一般に音楽史において、啓蒙期のフランス知識人は、「カストラート」に対して極めて否定的な立場を取ったと図式化されるが、詳細なテキスト読解によって、彼らの立場が実際には極めて両義的なものであることを明らかにした。(3)「去勢者たち」をめぐる歴史的記述の再検討にかんしては、ヴォルテールの通称『習俗論』とモンテスキューの『法の精神』を中心に据え、他の歴史書や政治的著作を参照しつつ、二人の大思想家が「宦官」に込めた意味、機能、役割を分析した。「宦官」を論じるそのさまは、専制政体、ひいては「統治」をめぐる政治哲学上の立場表明となっていることを明らかにした。(4)ピュフォン、ディドロを中心とする博物誌的、生理学的、哲学的視点からの分析にかんしては、その壮大な思想体系の中で「去勢」や「去勢者」が占める役割を明らかにした。ピュフォンについては、安易な西欧中心主義的な人間論(そのような批判が絶えずこの思想家に向けられる)へと還元することなく、ディドロについては『生理学要綱』を絶えず他の著作に結び付けつつ、研究を進めた。(5)十八世紀フランスの代表的思想家の生ノ性の表象(特に伝記的言説と自伝的著作に注目する)との関係づけにかんしては、各思想家、作家が絶えず自らの経験を参照する作業、すなわち自己客観化の過程を分析した。これは各思想家の「去勢者」観、「去勢」観が、もしくはその概念の用い方が、自らの一個人としての生ノ性の正当化を目指している、といった単純なものではない。ルソーを例にとれば、「カストラート」について、『音楽辞典』の有名な「カストラート」項目において、これを自然に反するものとして根底から否定しているにもかかわらず、また「宦官」についても主要理論的政治的著作の中でこれを完全に断罪してにもかかわらず、小説『新エロイズ』では「カストラート」の歌声に決定的な肯定的意味を与え、自伝的著作では明示的に自らを「宦官」になぞらえている。そうした精緻な読解を行った。

これらの研究成果は、「交付申請書」にも、これまでの「実施状況報告書」にも明記したように、一冊の書物(単著書)として発表する予定であり、個別の「研究成果」として各年度に発表することは控えた。諸般の事情により単著書を研究期間内に刊行することはできなかったが、一刻も早く実現できるよう、次年度以降も作業を継続していく予定である。しかしながら、これと重複せぬかたちで、以下に示すような研究成果を発表することができた。

まず、ヴォルテールとルソーとジャン＝フィリップ・ラモアについての調査を深めることで、ラモアの代表作《優雅なインドの国々》や、ヴォルテールの代表作『ザイール』などにおける「オリエント」や「宦官」の重要性を確認したのち、上演時(1745年)にすでに絶対的権威となっていたヴォルテールと、作曲家として揺るぎのない地位を確立していたラモアの共作コメディ・バレエ《ナヴァールの王妃》と、ルソーが改作してうまれたとされるバレエ《ラミールの饗宴》という作品を例にとり、フランス啓蒙を代表するこの三者の複雑な思想的対立を読みとった。これは《Sur les Auteurs des Fetes de Ramire: lecture d'un passage des Confessions de Rousseau》という論文として発表した。さらに、これを発展させるかたちで、とりわけ作者性という点に着目し、「《ラミールの饗宴》の「作者」をめぐる」という論考として刊行した。

次に「宦官」の表象と、十八世紀におけるいわゆるオリエンタリズムとをより広い視野で捉えるために、これらを整理し、「十八世紀フランス演劇における「オリエント」再考 - モリエールから出発して」という口頭発表を行った。この口頭発表ではさらに、ヴォルテールの代表的演劇作品である『ザイール』と『狂信、あるいは預言者ムハンマド』を集中的に分析し、今日いわば隠蔽される傾向にある哲学者のオリエント観の危険な側面を明らかにした。

さらに、ヴォルテールの主要著作を読み直し、その「性」の諸問題を整理したのち、それが哲学者の自伝的著作ならびに哲学者についての伝記的言説と取り持つ関係について詳細に分析し、「ヴォルテールの「生涯」 伝記あるいは自伝の必然性/不可能性」という論考として発表した。ヴォルテールの数少ない自伝的著作と一部の書簡は、そのセクシュアリティについて知るうえで貴重な資料であり、これを緻密に分析することは極めて重要である。すでに先行研究において指摘されているように、「子を残すこと」を拒否あるいは拒絶したとさえるつる、哲学者の複雑な生ノ性について、これがどのように公衆に提示されているかを明らかにした。

ルソーについては、「性」の諸問題を様々な角度から取りあげる『新エロイズ』について、「欲望」という観点から分析し、《Les mensonges de Julie et l'écriture du désir féminin chez Rousseau: variations précieuses?》という論考としてフランスの研究誌 Rousseau studies に発表した。また、その延長線上で、「今、『エミール』を読む困難、『エミール』について語る困難」と題した講演を行った。ルソーは『エミール』で職業適性と性差の問題を扱う際、「裁縫と針仕事」を「女たち」、あるいは「女と同じような仕事をせざるをえない足の不自由な男」にしか認めるべきではないとし、「宦官」に侮蔑的に言及しているが、『告白』第十二巻では、まさに女たちにまじって「針仕事」をする自身を誇示するかのよう描き出していることを指摘し、ルソーにおけるセクシュアリティの問題の複雑性を明らかにした。

付言しておけば、令和5年に刊行した『ジャン＝ジャック・ルソー: 「いま、ここ」を問いなおす』には、本研究を遂行する過程で得た知見を反映させることができた。具体例を挙げれば、『人間不平等起源論』におけるイスラームの重要性、『社会契約論』におけるムハンマドの重要性を叙述に織り込むことができた。

以上のように、当初から、本研究の成果は一冊の書物(単著書)として発表する予定であり、

成果を書物としてまとめる作業こそ諸般の事情で遅れているものの、様々な成果を個別に発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Shojiro Kuwase	4. 巻 7
2. 論文標題 Les mensonges de Julie l'écriture du desir feminin chez Rousseau : variations precieuses ?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ROUSSEAU STUDIES	6. 最初と最後の頁 165-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑瀬章二郎	4. 巻 49
2. 論文標題 「ヴォルテールの「生涯」 伝記あるいは自伝の必然性 / 不可能性」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学フランス文学	6. 最初と最後の頁 147-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤山人、桑瀬章二郎	4. 巻 49
2. 論文標題 編者序 (セレブリティの呪縛 : 18~20世紀フランスにおける著名作家たちの肖像)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学フランス文学	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shojiro Kuwase	4. 巻 49
2. 論文標題 Sur les Auteurs des Fetes de Ramire: lecture d'un passage des Confessions de Rousseau	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Zinbun	6. 最初と最後の頁 125-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桑瀬章二郎	4. 巻 II
2. 論文標題 《ラミールの饗宴》の「作者」をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 GRIHLLI 文学に働く力、文学が発する力	6. 最初と最後の頁 53-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 桑瀬章二郎
2. 発表標題 18世紀フランス演劇における「オリエント」再考 - モリエールから出発して
3. 学会等名 モリエールを考える (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 桑瀬章二郎
2. 発表標題 「ヴォルテールの「生涯」 伝記あるいは自伝の必然性 / 不可能性」
3. 学会等名 立教大学文学部文学科主催公開シンポジウム「セレブリティの呪縛：18～20世紀フランスにおける著名作家たちの肖像」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 野呂康 森本淳生、桑瀬章二郎、嶋中博章、辻川慶子、杉浦順子、中畑寛之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 吉田書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 GRIHLLI 文学に働く力、文学が発する力	

1. 著者名 桑瀬 章二郎、ジャン=ジャック・ルソー	4. 発行年 2023年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 136
3. 書名 今を生きる思想 ジャン=ジャック・ルソー 「いま、ここ」を問いなおす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関